

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第2回



イラスト=安成 晶

# 探検とはプロジェクトである

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)

この連載は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。当時、京都大学探検部に所属する学生であった私は、仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年ようやく実現した。帰国後、私はその探検の報告を約半年かけて書き上げたが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、眠り続けることになってしまった。今回、1960年代末の学生による「探検」の貴重な記録として、ほとんどそのまま『科学』に、十数回に分割して掲載していただくことになった。内容は、探検

の思い立ちから帰国まで、私たちは何をやり、何を見聞し、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものである。

前回(第1回)は、この探検を思い立ち、実現しようとして探検部に入部した経緯についての部分を紹介した。京大探検部がいかに不思議な組織であったか、その中で、いかにして自分達の「探検」計画を理解してもらおうか、私たちにおける「探検とは何か」という議論も含めて報告されている。今回は、ようやく実現にこぎつけるまでの部分を紹介する。

## 隊長をさがせ

とにかく、まず隊長をさがすのが急務である。ぼくたちのあせりを見たある先輩はいった。「君ら、そんな行きたいのやったら、隊長なんか探す必要ないやんけ。君ら3人だけでも行けるやんけ」。そう。確かに、行くだけなら、行けるに違いない。隊長を探す時間をアルバイトにでも精を出し、安い船を見つけ、貧乏旅行に徹すれば、地の果てまでも、行けるには違いなかった。が、ぼくたちの目的は今や、単に行くことではなく、行って、何かの目的を追求することにあつた。と言っても、誤解しないでもらいたい。純粹に学問上の目的のためだけに計画をたてる学者様の探検を志向しているのでは決してない。パタゴニアへの憧れ、ロマンティシズムというものが、ぼくたち

の行動の源泉であることには、変わりはない。しかし、たとえ「行きたい」という気持だけで、憧れの地に行きついたらとしても、無目的に、ただ現地をぶらつくだけでは、決してそのロマンも満たされない。ぼくたちには、少なくともぼくには、かたくななまでのそんな確信があつた。また、こんな例も知っている。ヨーロッパやアフリカに行きたいという先輩がいた。かれは、現地で人間を知る方法として、人類学調査をやりたいと思った。しかし、個人的に行こうとして、安くあげるために、ヒッチハイクなどをしながら、東南アジアから陸づたいに現地まで行った。ようやく数カ月かかって現地に着いてみると、もう金が残りに少なくなっていた。現地で皿洗いなどのアルバイトをして、やっと帰りの交通費ができた頃には、身も心も疲れ果て、調査どころではなくなっていた。ヒ



ツチハイクや皿洗い自体が旅の目的であれば、それでいい。が、目的地で何かをやるのが目的なら、余りにも消耗な方法である。

隊長の「価値」は、まず何よりも、資金調達をしてくれる、ということである。そして、現地での行動を、テーマにそって、より実り豊かなものにしていく手腕がある、ということであろう。そのためにも、野外での調査や観測を通しての科学に身をおく研究者、それも、ぼくたちのような考え方に理解のある人が望ましかった。

ボリビア隊に負けてはなるものかと、隊長候補者を求めて走り回る日々が続いた。

パタゴニア調査経験のある、湖沼学の助教授に頼めそうになるも、没。つぎに、防災研究所の樋口明生助教授(海洋学)が候補にあがった。樋口助教授は、京大山岳部のガネッシュ・ヒマラヤ登山隊長の経験もあり、パタゴニアの氷河調査がしたいということで、内諾が得られた。ところが、1968年2月、長く続いたネパール・ヒマラヤの登山禁止が解禁となり、AACK(京都大学学士山岳会)のヤルンカン登頂計画の中心である氏は、急に出てきたヒマラヤの可能性で辞退された。やっと思つたらこの調子だ。ふり出しに戻して再び、いけそうな人物を求めて走り回った。北海道大学に行きたいという人がいると聞いて、わらをもつかむ思いで、乏しい3人の財布から金を出し合い、ひとり札幌に派遣したのも、この頃であった。

ほとほと困ったところに、樋口氏の先輩で、同じ研究室の中島暢太郎教授(災害気候学)が急に、隊長を引きうけてくださることになった。樋口氏が、「行くんやったら、教授の承認もいるし」といっていたその教授自らがのりだすことになった。その背景には、中島教授、樋口助教授らが、名古屋大学の樋口敬二教授らと、氷河研究会を組織し、世界中の氷河を比較研究していこうという動きがあった。チリ・パタゴニアも、湿潤温暖氷河地帯の一環として、調査してみようということになった。とにかく、ぼくたちの苦労も、むだではなかった。

## 「アンデス委員会」の発足

1968年4月、ここに、山本紀夫・渡辺信両君らのボリビア隊と、ぼくたちのチリ・パタゴニア隊を、資金調達や対外交渉の便宜をはかるため、四手井綱英部長(農学部教授)の判断でひとつに統一し、京大探検部アンデス学術調査計画委員会という、長つたらしい名の委員会が発足した。

ボリビア隊は、中央アンデス栽培植物調査班となり、タバコの調査をカバーするため、専売公社の研究者である川上嘉通氏が加わり、計4名となった。

チリ・パタゴニア隊は、チリ・パタゴニア氷河・古地磁気調査班となり、大学の関係で全期間は滞在できない中島教授を肩がわりする副隊長として、AACKの寺本巖氏(松下電子工業K・K)、教授の氷河調査を助ける井上治郎氏(地球物理大学院生、AACK会員)が加わり、計6名となった。寺本氏は初めて知った人だが年が30歳で、隊長と学生の間であり、井上氏は、3人とも山岳部時代から知っており、とくにぼくとは、中学以来のつきあいで、チーム・ワークの点では問題なくいける構成だった。

いちどにふたつの探検隊を出すということは、資金の面から相当な冒険で、部長も大分悩まれたという。が、ふたつの計画がここまで来た以上、部長として、どちらかを切るということはできなかったに違いない。食うか食われるかの勝負には、ともに軍配があがったかっこうになったが、とも倒れという危険もある。ともに倒れないためには、一致協力して、次の難関——資金調達——にあたらねばならなかった。

## 探検とは金なり

やっと思つた2つの計画もまとまり、全隊員も決まった。これからは、いよいよ具体的な、もろもろの準備である。

まず必要なのは資金だ。2つの隊を出すとなると、約1000万円の資金がいる、という見つもりになっていた\*。今まで、探検部からも、多くの探検隊を出してきたが、こんな大金の予算になっ



表1——チリ・パタゴニア プエルト・エデンにおける月および年間降水量(1960~66年の6年間の平均値)、単位はmm.

| 1月  | 2月  | 3月  | 4月  | 5月  | 6月  | 7月  | 8月  | 9月  | 10月 | 11月 | 12月 | 年間   |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 264 | 288 | 272 | 283 | 380 | 206 | 210 | 233 | 212 | 190 | 199 | 263 | 3000 |

たのはなかった。しかし、とにかく調達しなければ行くことはできない。

アルバイト、資金カンパ、新聞社や出版社と契約して金をもらう、といろいろあるが、やはり、多くの会社や団体を走りまわって寄付をつのが中心となる。ぼくたちの隊のように、学術調査を目的とした隊なら、最近(1960年代末)は、文部省の、海外学術調査研究費というワクから、一部または大部分の資金を受けられる隊がある。しかし、それは、ほんの一部の隊しか恩恵にあずかっていない。しかも、ぼくたちの隊のように、学生中心の隊であると、はじめから、その対象には、はいらない。たとえ、結果的に、りっぱな学術調査をなしても、学生主体というだけでオミットされるのだ。

とにかく、予算の大部分は寄付によらねばならなかった。

5月、6月、7月、8月と、週に2~3日は、誰かが、大阪、京都の町を、会社まわりで走りまわっていた。1000万ちかくを集めるには、数でこなさねばならなかった。はじめは、先生のかばん持ちというかつこうで、ついてまわっていたが、そのうち、学生だけで、しかも紹介状もなしに、とびこみでまわることもなった。京阪神のめばしい会社を調べ、片っぱしからまわる。ぼくは、自宅が神戸ということで、灘五郷の酒造会社をまわらされたことがあった。「さけと南米となんの関係ありません」。ぼくは弱った。が、ここでまけたら、わざわざ来たかいがない。「ハア、南米には、日系人が多くさけの輸出市場にいいとこですし、栽培植物班の方で、コメの調査もしてきます。そして、あたらしい品種でも持ってかえれば、さけつくりによいコメができる可能性があります」。こんなことばかりしている日々がつづいた。しかし、なかなかおもうように資金はあつまらない。

\* 当時の物価や給与水準などを参照して、現在のお金に換算すると、優に5000万円を超える額である。

やっと出してくれることになっても、5000円とか、1万円とかという会社が多かった。それでも、ちょっとでも目標に近くなったぞと思って気を休めるほかなかった。隊を構成するまでの、もろもろの苦労も忘れて、「要するに、遠征できるか否かは、かねだ」などとおもったりすることもあった。

しかし、探検にたいせつなことは、ほかにまだまだ山づみさされていた。

### 装備の問題

ぼくたちの行動するチリ・パタゴニアの複雑な諸島部から、氷河地帯にかけては、気象条件の悪さ、地形のむつかしさ、文明地域からの隔絶など、多くの困難があった。装備もとうぜん、その困難を克服するものが必要とされた。

まず雨だ。南米最南部、太平洋側のこの地帯は、世界でも有数の多雨地帯となっている。1年中、雨期・乾期の区別なく雨が降る。しかも、ほとんど毎日降るといってよい(表1)。そんなところで野外活動をするのだから、完全な雨具と、防水テントが絶対必要となる。以下、おもなものを挙げてみよう。

**長ぐつ:** 海辺でボートから乗りおりしたり、沼沢地を通ったり、川を渡渉したりすることが多いので是非とも必要と考えられた。とくに、寒い地方なので、内側にキルティングをつけ、長さも長めに、ひざまでにし、さらに足を入れるところにナイロンのフードをつけ、締められるようなものをこしらえた。

**雨具上下:** 山登りや探検における雨具は、昔からいろいろと考えられてきた。ポンチョ風のものの、レインコート式、いわゆる雨合羽式のもの、ヤッケ等とあるが、どれも一長一短、完全防水をねらえば、中から汗をかいてぬれ、風通しをよくすると、外からの雨が入ってくる。けっきょく、ぼくたちは、完全防水をむねとして、ひと



つは、主に氷河上用に、軽くて丈夫なナイロン地の裏にうすくゴムびきををした、釣り師用のコート上下と、もうひとつは低地用に、ふつうの厚手のビニールでできた雨合羽を携行することにした。

**テント:** これも、雨、そして強いパタゴニア風を想定して設計した。強風に耐える布地(ナイロンなど)で外側をつくり、内張りに防水性の布地をつかい、テント内で雨を防げばという案もあったが、けっきょく、風といてもつねに吹いてはいないだろうということで、ビニロン#8100という、日本の誇るべき強い布地に、かなり防水をきかしたもので作り、通風はベンチレーター(通風孔)を大きくすることで妥協したが、どうせ風でとばされるだろうと思ってフライ(雨よけカバー)を作らなかったことは、現地で悔やまれることになった。

**モーターボート:** 一番問題になったのは、やはりこれだった。まず、モーターボートを持っていくべきか否かという議論があった。現地でチャーターできるものなら、なにも苦労して持っていくことはない。が、現地プエルト・エデンにそんな船はあるか、あったとしても、チャーター代はどうなのか。とんとわからなかった。プエルト・エデンで宣教活動をしている神父に問い合わせると、船はあることはあるが、1日80ドル以上はかかるなど書いてきた。とにかく、船がなければわれわれの計画はまったく成り立たないことを考えて、少々負担がかかっても、ぜひとも持っていくことにした。しかし、わからぬことが余りにも多すぎた。いったいどの程度のボートであれば、あのフィヨルド、諸島地帯の海の状況で使えるのか、しかも、海の状況とはどんなものなのか、何人が、何kg位の荷物と乗って、どの位の速さで走れるボートでなければいけないか等々。要するに、ほとんど何もかも未知数だった。現地の海の状況については、情報源によりまちまちだった。ある本によれば「海は鏡のように平らであった」とあり、他の本によれば「世界最悪の天候といわれるこの地域で、船は荒波と激しい風にゆすぶられ……」とある。いったいどういうことなのか。

要するに天気の変化が激しいということなのだろうか。だとすれば荒天の時の海の波、風はどんなものなのか、天気変化の周期はどの位なのか。……さらに資料、情報を集め、話し合った結果、ボートはやはり、多少の風波を乗りきれたらいいものとし、荒天になればすぐに避難することを原則に考えよう、幸い、細い水道、フィヨルド地帯なので、どこか避難できる小さな入江もところどころにありそうということになった。次に、ボートの種類、大きさはどうか。ゴムボートにするか、堅い、たとえばグラスファイバー製のボートにするか、という問題がでた。ぼくたちの目的地より少し北のタイタオ半島付近で調査をおこなってきた北大隊の場合は、ゴムボートに10馬力程度の船外エンジンをつけて行動している。しかし、ぼくたちの場合、かなり行動半径が広い。そこで、スピード、運搬能力、乗りごこち、を中心に考慮し、グラスファイバーのボートに決めた。もちろん、ゴムボートも、湖沼調査用、川の渡渉用、海岸付近での上陸用等に1つ持っていくことにはした。そして、ボート・エンジン係をおおせつかった井上民二を中心に、グラスファイバーのボートの資料を集めた。といっても、既製のグラスファイバー・ボートは、せいぜい海水浴場で使う程度のレジャー用が大部分で、荷物を運んだり、長距離使用にたえるものは、少ない予算内ではなかなかない。結局、ただボートのかっこうをただだけの実用ボート、永大産業のUT-450というのを改造することにした。波よけ、フロントガラスをつけ、雨が多いのでフードをつけ、長距離運転にも疲れないように前ハンドルにし、……と改造したのが図のようなモーターボートである(図1)。エンジンは、航行能力のみを考えると、大馬力であればあるほどいいわけだが、燃料消費と、何よりも予算の制約から、ジョンソンの40馬力のエンジンと決まった。

すべての改造が済み、エンジンをとりつけ、琵琶湖畔の永大ボートハウスで進水式をやり、始運転したのは9月も終わりに近い頃だった。ボート名は、あっさりと「KIOTO(きょうと)」と呼ぶことになった。



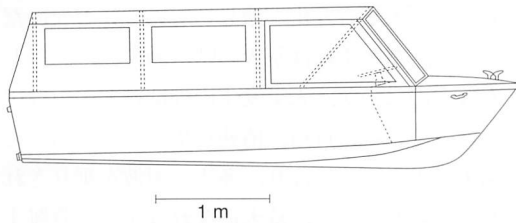


図1——チリ・パタゴニアへ持参したグラスファイバー製のボート(UT-450 KIOTO号)。規格:全長4.5m,全幅1.6m,深さ0.68m,重量200kg。

## 物あつめ

酷暑の8月も終わり、やがて9月となった。10月の出発をめざして、すべての準備をととのえていかねばならない。

まず資金だ。もう募金活動をはじめてから4カ月、まわった会社・団体の数は約250にもなっていた。が、実際に協力があつたのは、まだ100そこそこ、額も目標の半分以下、といった状態だった。が、今となつてはたとえ借金してでも行かねばならないとおもうと、妙に心がおちついた。あとは、隊長さんにまかせよう。ぼくたちには、まだまだすることがあつた。

その1つに、装備の予算をできるだけ節約するために、物品の提供をできるだけとりつけることがあつた。募金にはしぶい顔をする会社も、物品援助には、自社の製品の宣伝にもなるということで、こころよく協力してくれるところが多かつた。中には、現地で自社の製品が使われているところや、南米の人々に使われているような場面を写真にとってきてくれなどという注文つきもあつた。

この「物もらい」がまた徹底していた。とにかく、必要なものは、まず買おうと思うな、もらえるならもらえという根性になつたことは確かだつた。おかげで、だいぶ資金面で助かつたことは事実だが、反面、装備の調達、準備に余計な時間をかけてしまいがちだつた。たった10着程度のスポーツシャツをもらわんとして、2回、3回と同じ会社に足を運んだり、そばのいいやつをもらおうとして、奈良の片いなかまで出かけたり……など。部員諸君も、これにはかなり走りまわってくれた。参考までにもらい集めた物品は、ざつと以下のようなものである。

テント布地、寝袋、簡易ベッド、登山用上下衣、ザイル、ロープ類、雨具、セーター、登山用くつ下、手袋、毛下着上下、マホウ瓶、アイスボックス、炊事用鍋、釜一式、石油コンロ、アルミホイール、タンク、密閉容器、ビニールチューブ、キャラバンシューズ、長靴、エアマツトレス、ゴムボート、ばねバカリ、懐中電灯各種、電池、ラジオ、トランシーバー、テープレコーダー、チェンソー、フィルム、鉛筆、ボールペン、ノート類、プラスチック食器、バケツ、折りたたみカサ、マッチ、テープ類、石けん、洗剤、食料品(粉末ジュース、茶、インスタントコーヒー、ココア、紅茶、調味料、うどん・そば、油、バター、チーズ、日本酒)、薬品、エンジン用工具、梱包用ワイヤーバンドボックス、カートンボックス、錠、カメラ一式、ストロボ、目覚し時計、つり道具、タイプライター、発泡スチロール板、バッテリー、登山用具、双眼鏡、歯ブラシ、ローソク、等。

そんな「物あつめ」などに熱中していた9月のはじめ、ぼくたちのパタゴニア班は、琵琶湖で1日、トレーニングをした。ともすれば遠征というものは、出発前に行くための準備に忙殺されて、いつてからのための準備はなおざりにされがちである。そこで、忙しい中ではあつたが、ボートを使つての調査のトレーニングをしたわけである。そのトレーニングとは。

まず3人がボートにのり、1人はコンパスを見ての方向指示、1人はエンジンのかじとり、もう1人は定点での測深(水深想定)係となり、あらかじめ地図上で決めたコースを走る。陸に残つた3人のうち、2人は、2点からトランシット(測量儀)をのぞいて、ボートとトランシーバーで確認し合つた時のボートの位置をはかり、残る1人は、風向、風力、温・湿度、放射量を測る。これら一連の動作を各係を交代しながら、2時間おきにほぼ丸1日、徹夜でやつた。さすがにきつかつた。が、このトレーニングは、全員がボート操縦、氷河上でのトランシットによる測量法、気象観測をやりおこせるためには有益だつた。学術的探検のためのトレーニングには、山登りのそれと



はまた異なるしんどさがあった。

## 追いこみ

そうこうするうちに、アンデス班の2人(山本、渡辺)が出発することとなった。思えば、部長教授の判断のもとに、2つの計画をいっしょに出そうとして、アンデス委員会なるものをつくり、すべての準備をまったくいっしょにしてやってきた。

2人は、9月半ば、和歌山の住友金属の製鉄所で、5万tの鉱石運搬船に乗りこんだ。残ったぼくたちと、また南米での再会を約して、一足先に船上の人となった。さあ、次はぼくたちの番だ。

10月にはいり、いよいよ出発もせまってきた。隊長の中島教授の研究室は、京都の南のはし、伏見区の中書島にあった。京大防災研究所宇治川水理実験所というところだ。ここに装備を集め、梱包をはじめた。

ベニヤ板でできた梱包用の、大きなこうり位の箱をくみため、色を塗り、装備をポリエチレンで1つ1つパックし、しわけして箱に入れ、箱ごとの装備リストをつくり、……。毎日毎日、探検部の仲間が入れかわり、たちかわり手伝いに、この田んぼのまん中のへんびな実験所まで手伝いにきてくれた。作業は夜遅くまでなることもしばしばだった。先発の井上治郎と伊藤隆が千葉から出発する直前など、3日間ほど、ぼくはほとんど徹夜状態が続いた。2人が京都を発つ前日、ぼくはかれらがチリまで携行する装備リストを作っていた。25個の箱の中味をいちいちスペイン語になおし、数、量、ドルになおした値段をかきそえ、タイプにうち、さらにコピーをつくり、……とやっているうちに、明け方近くになってしまった。ガランとした実験所内の複写機の前でボーッとしていると、数日間の疲れと睡眠不足でか、ぼくのうしろで、2,3人の人がテレビの野球を見てさわいでいるような幻聴を感じたり、そのコピーを、翌朝、京都を発つ2人に渡すはずであったが、ついウトウトしているうちに寝坊し、千葉までかれらを追いかけていくはめになったり。とにかくぼくたちの班も、やっと10月9日、2人が南米への途

についた。

ひと息つく間もなく、今度は井上民二とぼくの出発の準備だ。また中書島での梱包がはじまった。しかも今度は、やっかいなモーターボートをかかえている。その梱包も頭の痛い問題だった。けっきょく、重量や、船への積みやすさを考えて、全体をすっぽりと木ワクでおおような梱包にした。

10月21日、数日後に京都出発をひかえ、連日、中書島で、部員の協力をえて、梱包をしていたが、この日は、手伝いにくる部員はぐっと少なかった。多くの部員は、国際反戦デーのデモにいていた。探検部員には社会や政治の問題、というより人間の生き方、あり方といったことを真剣に考えている人間が多い。常日頃から、農村や山村に入って調査をおこなっている仲間には、とくにそういった傾向が強いようだ。かれらは、ふだんの探検、調査活動とともに、学生運動にも積極的だった。

かつて大学当局からは、「同学会か探検部か」ということがよく言われていたという(同学会というのは京大の学生自治会のこと)。どちらも、ハデに活動して、本部学生部にめんどうをかけることが多かったからである。たしかに、学生運動も学生探検も、自分の全部を、一時的にしる、「かける」ことを必要とする点で似ている。が、違う点は、学生運動が、「社会の変革」に直接かかわろうとしているのに対し、探検のほうは、むしろ、個人的な何らかの興味の追求を出発点としていることだろう。そこに、学生として探検をやるものとするものの1つの悩みがあった。ここ半年、いや1,2年というもの、ただひたすら南米のさいはてへ行くために、ある意味で馬鹿になって熱中していたが、そのため、世界や日本の社会問題、例えば、ベトナム、アラブ、人種問題、安保、公害……などといったことに、結果的に無関心となっていく自分に気がつくことがあった。もちろん、といって、この計画をかたくなにやりぬこうとする気持はかわらないのだが、手伝いが少ないなあと、フト心にてた軽い嘆きは、そういう自分自身への嘆きにかわっていった。



## 出発

10月27日。多くの人々に見送られて、井上民二とぼくは宇野行の急行「鷺羽八号」にて、一路倉敷へ向かった。ぼくたちは、水島の製鉄所から船に乗ることになっていた。

船が入港するまで、まだ2,3日あった。その間、大原美術館などを見学したり、久しぶりにのんびりできたのもつかの間、京都から装備がはこばれてきた。水島港の代理店前に、7t積みトラックが、モーターボートと10個ほどの箱をつんでとまった時は、こんな多くの装備をたった2人で南米まで運ぶのかとウンザリした。

やがて、ぼくたち2人の便乗する川崎汽船の鉄鉱石専用船「八洲川丸」(約5万重量t)が入港した。長さ約5mのボートも、代理店や船員の人たちの尽力で無事、八洲川丸の後甲板にしばりつけられた。

11月1日、午後4時。ばかに長いこの船は、タグボートに引かれて製鉄所の岸壁をゆっくりとはなれ、静かに、夕ぐれの瀬戸内海にはいった。鉄鉱石の粉をあびながらのあじけない出港も、心高鳴るぼくたちには、問題ではなかった。いたるところに漁船が走り回り、水路も細いところだけに、船長以下ブリッジの当直員は緊張していた。

井上民二とぼくは、その横で、当分見おさめの日本を、見つめていた。2人の顔が合った。思わずニヤッと笑いあう。それ以上はことばを必要としなかった。2年間の努力は、この日のためのものだった。

翌朝、ゆったりとしたローリングのなかで目を覚した。ブリッジに上がってみると、もう一面、緑色の大海原だ。船は遠州沖を東に向かって走っていた(写真)。



太平洋を横断して、一路南米に向かう鉄鉱石運搬船八洲川丸。

